

|            |                                     |            |         |          |      |
|------------|-------------------------------------|------------|---------|----------|------|
| 2-2        |                                     |            |         |          |      |
| 主題         | 入浴移乗ボードの導入プロセスにみる「持ち上げない介護」の推進による効果 |            |         |          |      |
| 副題         | 巻き起こせ、介護イノベーション                     |            |         |          |      |
| キーワード<br>1 | 持ち上げない介護                            | キーワード<br>2 | イノベーション | 研究(実践)期間 | 19ヶ月 |

|           |                                      |
|-----------|--------------------------------------|
| 法人名・事業所名  | 社福) 友愛十字会 特別養護老人ホーム砧ホーム              |
| 発表者(職種)   | 三浦好顕(介護職員)、尾上里織(介護職員)                |
| 共同研究(実践)者 | 山口公司(介護主任)、和田美雪(介護職員)、小谷野祐樹(機能訓練指導員) |

|    |              |     |              |
|----|--------------|-----|--------------|
| 電話 | 03-3416-3164 | FAX | 03-3416-3494 |
|----|--------------|-----|--------------|

|       |  |
|-------|--|
| 事業所紹介 | 砧ホームは、平成 4 年に東京都世田谷区砧(きぬた)に開設した、入所定員 60 名、短期入所 4 名の従来型の特養です。都内特養で唯一の東京都ロボット介護機器・福祉用具活用支援モデル事業のモデル施設です。施設には計 20 台の介護ロボットが稼働しており、専門性の高い最先端の取り組みを推進しています。 |
|-------|--|

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成 27 年 3 月、移乗用リフトの導入を皮切りに、「持ち上げない介護」を推進していた。その過程において現状のケア場面を見直したところ、移乗・排泄・入浴の各場面で「持ち上げない介護」とは逆の抱え上げる介助が引き続き行われている実態を確認した。なかでも、入浴場面におけるシャワードーム浴槽のストレッチャーから更衣用ベッドへの移乗は、職員 2 人掛かりで行われており、身体的・業務効率的に負担と感じている職員が多数いることがわかった。「持ち上げない介護」をさらに進めていく上で、この非効率で負担の大きい介助方法を見直すことは避けて通れない課題であると認識し、介護職員が中心となりその改善に取り組んでいくこととした。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

入浴場面の移乗における職員 2 人掛かりでの抱え上げる介助を廃止し、入浴用移乗ボード(以下、「ボード」)を導入し活用することで、①より安心・安全なケアの提供、②職員の身体的負担の軽減、③入浴介助業務そのものの効率改善、以上 3 つの効果が得られるものと仮説を立てた。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

平成 27 年 10 月に介護係リハビリ担当職員が中心となり「持ち上げない介護」についての施設内勉強会を開催。そこで入浴場面に新たな移乗介助方法を実践していくことを宣言し、同年 12 月よりボードの選定を開始した。翌平成 28 年度の事業計画には、具体的に「ボードの導入と活用」を掲げ取り組みを本格化させた。選定の対象としたボードは、滑りやすさだけでなく、血液の汚染までを想定して作られたカバーや二つ折で持ち運びに便利なものなど、様々なデモ機を交互に借用してモニタリングを実施した。ボードの価格についても予算に照らしながら、その都

度リハビリ担当者会議で評価を繰り返し、平成28年10月、導入するボードを決定した。12月にはボードを用いたケア手順書を作成し、介護職員一人ひとりに対しリハビリ担当職員が技術指導を開始した。同年度末には、シャワールーム浴槽のストレッチャーから更衣用ベッドへの移乗について、遂に、ボードを活用した介助方法を施設の標準ケアとすることに成功した。

#### 《4. 取り組みの結果》

ボード導入3ヶ月後に職員への意識調査を実施。導入前は職員2人で抱え上げる介助を実施しており、身体的負担だけでなくもう一人の職員に協力を要請するために生じる待ち時間の課題も発生していた。導入後は、抱え上げる介助を廃止したため身体的負担が軽減し、一人で介助が可能になったことから待ち時間から解放され、トータルで介助に要する時間が短縮されたと感じる職員が62%と半数以上にのぼっていることが分かった。その一方で、逆に、技術的な熟練度に不安を抱き、身体的負担は軽減された職員が95%、時間の短縮には至っていないと感じている職員も38%いることがわかった。なお、平成29年6月末までに、本介助に関するヒヤリハットおよび事故は発生していない。

#### 《5. 考察、まとめ》

「持ち上げない介護」を追求しボードの活用を進めたことで、抱え上げる動作を必要としなくなり、身体的負担が大きく軽減された。また、一人で介助が可能になったため、応援の職員を待つ時間が省かれ、移乗に要する時間が短縮された。加えて、応援する側の職員においても、移乗を手伝うために対応中の利用者の元を離れなければならなかったが、ボードの導入によりその必要がなくなり、入浴全体の時間短縮と一層の安全を図ることができるようになった。これらの成果の根底において、リハビリ担当者会議にて計画的にプロセス管理を行い、担当者がそれぞれ何をするかを互いに共有しながら進めてきたことが、一連の改善活動を円滑にしたと考える。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

平成28年8月3日開催「二次障害を作らないためのやさしい動作介助・ポジショニングに関する研修会」(東京都高齢者福祉協議会/職員研修委員会/介護職員研修委員会主催)研修資料  
「新しい福祉機器と介護サービス革命/導入の視点と活用のポイント」(2014)、公益財団法人テクノエイド協会、日本医療企画

#### 《8. 提案と発信》

本研究は、「持ち上げない介護」を推進していくことで職員の意識が変わり、より良いケアをイノベーションすることができた事例であると考えている。「持ち上げない介護」の推進は利用者に安全と安心を提供し、介護者の負担の軽減を図ることができる。継続していくことで、介護職員の離職率の低下や新たな人材の確保にもつながる意義深い取り組みであると考えている。